

# 日本語表現教科書から見る敬語指導の問題点

野呂 健一

高田短期大学キャリア育成学科

## 1. はじめに

筆者は高田短期大学において日本語表現科目を担当しており、教科書採用の検討等のために、随時市販の日本語表現教科書に目を通している。日本語表現教科書は学生生活や社会人生活で求められる日本語表現能力の養成を目的としており、先生や上司など目上の人物に対する言葉遣いを学ぶ必要性から、それらの多くは、敬語を学習項目の一つに含めている。

日本人の大学生に対する日本語リテラシー教育の実施は 1990 年代以降始まり、実施する大学が増加している。日本語リテラシー教育の実施状況を全国の国公立大学に調査した清水・秋山 (2010) によると、回答のあった大学のうち半数以上の大学で何らかの日本語リテラシー教育を実施している。また、「日本語学・言語学・日本語教育学」の専門家が日本語リテラシー教育を担当する大学が最も多いということである。一方、授業担当の専門を考慮せずに決めている大学と、半数以上が専門家以外である大学の合計比率は 43% に達しており、看過できない状況がある。

日本語学等の専門家以外の教員が日本語リテラシー教育を担当する場合、教科書の役割が非常に重要になる。本稿は、大学生を対象とした日本語表現教科書に見られる敬語に関する記述を検討するとともに、指導上の問題点について考察するものである。日頃、日本語表現教科書を検討する中で、指導者が十分な日本語学的知識を有していることを前提としているであろうと思われるものが多いことに気づいたことが研究の出発点である。

## 2. 調査対象とした日本語表現教科書

本稿が考察対象として取り上げた日本語表現教科書は以下の 10 種である。いずれも大学生の日本語表現力、特に文章表現力の養成を目的としたものである。また、2006 年に報告案が公開され、2007 年文化審議会答申「敬語の指針」における敬語の 5 分類との関わりを調査するために、2007 年以降に出版された教科書を対象とした。

- ① 沖森卓也・半沢幹一編 (2007) 『日本語表現法』三省堂
- ② 名古屋大学日本語表現研究会編 (2008) 『書き込み式日本語表現ノート』三弥井書店
- ③ 伊藤義隆・小森潔監修 (2009) 『日本語リテラシー』新典社
- ④ 中谷克己・野村 和代 (2009) 『大学生のための日本語の基礎－表現編－』帝塚山大学出版会
- ⑤ 米田明美他 (2010)

- ⑥中村萬里他（2012）『実践日本語表現ワークブック』双文社
- ⑦日本語教育研究会編（2011）『日本語表現法』アイケイコーポレーション
- ⑧西尾宣明編著（2013）『新版日本語表現法—「書く」「話す」「伝える」ための技法』樹村房
- ⑨丸山顯徳編著（2014）『キャリアアップ国語表現法』（十四訂版）嵯峨野書院
- ⑩森口稔・中山詢子（2015）『基礎からわかる日本語表現法』くろしお出版

### 3. 敬語の3分類と5分類

2007年文化審議会答申「敬語の指針」では、それまで一般的であった尊敬語・謙譲語・丁寧語という3分類に代わり、尊敬語、謙譲語Ⅰ、謙譲語Ⅱ、丁寧語、美化語という5分類が採用されている。従来の謙譲語を謙譲語Ⅰと謙譲語Ⅱに分け、従来の丁寧語から美化語を独立させたものである。

今回調査対象とした日本語表現教科書において、どのような敬語分類がされているのかを確認したところ表1のとおりであった。なお、4分類というのは、従来の3分類に美化語を加えたものであり、学校教育においても既に取り上げられている区分である。

表1 調査対象とした日本語表現教科書における敬語分類

3分類	『書き込み式日本語表現ノート』三弥井書店 『日本語リテラシー』新典社 『日本語表現法』アイケイコーポレーション 『新版日本語表現法—「書く」「話す」「伝える」ための技法』樹村房 <sup>1</sup> 『基礎からわかる日本語表現法』くろしお出版
4分類	『キャリアアップ国語表現法』嵯峨野書院
5分類	『日本語表現法』三省堂 『大学生のための日本語の基礎—表現編—』帝塚山大学出版会 『大学生のための日本語表現実践ノート』風間書房 『実践日本語表現ワークブック』双文社

謙譲語Ⅰと謙譲語Ⅱについては、どちらも自分（あるいは自分側の人物）を低めることで間接的に敬意を表現するものであることから、従来は謙譲語として1つにまとめられていた。しかし、謙譲語Ⅰと謙譲語Ⅱでは敬意を向ける相手が異なる。謙譲語Ⅰは動作や行為の向かう相手を敬うのに対し、謙譲語Ⅱでは聞き手に対する敬意を表すのである。例えば、上司から日曜日の予定を聞かれて以下の例のように答えるとする。(1)では「何う」対象である社長に対する敬意を表すのに対し、(2)の場合は聞き手である上司に対する敬意を表す。(1)で「何う」の代わりに「参る」を用いると社長に対する敬意が表されないことになるし、(2)の「参る」対象である「北海道」は敬意を表す対象ではないため、ここで「何う」を用いることはできない。

- (1) 日曜日は社長のお宅に伺います。(謙譲語Ⅰ)
- (2) 日曜日は北海道へ参ります。(謙譲語Ⅱ)

3分類あるいは4分類を採用している教科書では、謙譲語Ⅰと謙譲語Ⅱが、どちらも同じ「謙譲語」として扱われる。例えば『キャリアアップ国語表現法』(嵯峨野書院)では、「行く」の謙譲語として「まいる」「うかがう」が挙げられているが、その違いについての説明はない。同書では練習問題として敬語を用いて書き換える問題が出されており、その中に謙譲語を用いて書き換えるという設問がある。この設問に対して付けられている解答例が(4)である。

- (3) 先生のご自宅へは、父が行ったと思います。
- (4) 先生のお宅へは、父がおうかがいしたと存じます<sup>2</sup>。

ここで「うかがう」の代わりに「まいる」を用いて、「先生のお宅へは、父がまいったと存じます」としても誤用ではないが、「先生」への敬意は表されない。後に続く「存じます」は謙譲語Ⅱであり聞き手への敬意を表すことから、「父が行った」の部分は、「先生」に対して敬意を表す謙譲語Ⅰを用いるべきであろう。

前述したように、謙譲語Ⅰと謙譲語Ⅱはどちらも自分側の人物を低めるという共通点があるため、従来の敬語分類は「謙譲語」として一つにまとめられていた。その際、「まいる」と「うかがう」のような違いについては、母語話者として日本語を習得する過程で自然と身に付けていったと考えられる。

しかし、今日の日本語母語話者の敬語習得状況を推察すると、家庭や学校での日常生活において、丁寧語はまだしも尊敬語や謙譲語を使うことは少なくなっているのではないだろうか。今日の日本人の多くにとって、敬語は自然と身に付けるものから意識して学ぶものへと変わってきていると考えられる。つまり、敬語を一種の外国語として学ばなければならないということであり、「敬語の指針」において、謙譲語Ⅰと謙譲語Ⅱに分けられるようになった背景にはこのような状況がある。謙譲語Ⅰと謙譲語Ⅱの区別は他の敬語間の区別と比べると難しいため、小学校や中学校の国語科教育では、3分類あるいは4分類の枠組みが採用されていることも頷けるが、社会に出る前の大学生を対象とした日本語表現指導においては、社会人教育という面も含まれるため、謙譲語Ⅰと謙譲語Ⅱを区別した5分類の枠組みを採用すべきだと考えられる。

今回調査対象とした10種の教科書のうち、5分類を採用していたのは半数以下の4種であった。教科書を選択する場合には敬語記述だけでなく様々な条件を検討するため、5分類を採用していない教科書を使用することもあり得る。3分類や4分類の敬語分類の教科書を使用する際には、謙譲語Ⅰと謙譲語Ⅱの区別について、教科書を補足して指導することが必要であろう。

#### 4. 「いただく」の位置づけ

「いただく」は「もらう」の謙譲語Ⅰであり、授与される相手に対する敬意を表す。「もらう」が「先

生に教えてもらう」のように補助動詞として用いられるのと同様に、「いただく」も「先生に教えていただく」のように補助動詞として用いられる。補助動詞「もらう」「いただく」の場合、モノの授与ではなく恩恵が授与されることを表す。いくつかの日本語表現教科書には、このように恩恵の授与を表す補助動詞「いただく」について、誤解を招きかねない記述が見られる。

#### 4.1 「～ていただく」の場合

『大学生のための日本語表現実践ノート』（風間書房）では、謙譲語Ⅰの一般形として、「お／ご～する」「お／ご～いたす」「お／ご～申し上げる」とともに、「～ていただく」が挙げられている<sup>3</sup>。また、『日本語リテラシー』（新典社）では、謙譲語の一般形として「お／ご～いただく」が挙げられている<sup>4</sup>。

謙譲語Ⅰは、「自分側から相手側又は第三者に向かう行為・ものごとなどについて、その向かう先の人物を立てて述べるもの」であるため、動作の主体は話者（または自分側の人物）である。「ご連絡する」「お見舞い申し上げる」において、「連絡する」「見舞う」という動作の主体は話者である。相手側に向かう自分側の動作に、謙譲の意味を持つ形式である「お／ご～する」や「お／ご～申し上げる」をつけるということである。それに対して、「貸していただく」の場合、「いただく」のは話者であるが、「貸す」という動作の主体は相手側（または第三者）である。

したがって、「～ていただく」を謙譲語Ⅰの一般形として挙げることに疑問を感じる。「～ていただく」は「～てもらう」の謙譲語として、特別な語への言い換えの例に挙げるべきだと考えられる。日本語母語話者であれば、「ご連絡申し上げる」の代わりに「ご連絡いただく」を用いることはないが、大学の日本語表現科目の受講者には非母語話者が含まれることも考えられるため、「～ていただく」は、謙譲語Ⅰの一般形に含めるべきではないであろう。

#### 4.2 「～（さ）せていただく」の場合

「～（さ）せていただく」という形式を謙譲語の一般形として挙げている教科書もいくつかある<sup>5</sup>。『大学生のための日本語の基礎－表現編－』（帝塚山大学出版会）では、「動作・行為についての謙譲語Ⅰ」として、以下のように記述されている。

- ・謙譲の意味を持つ語を使う。 [例] 伺う／申し上げる／拝見する
- ・「お（ご）……する」「お（ご）……申し上げる」などの形にする。  
[例] お知らせする／ご連絡申し上げる
- ・「……（さ）せていただく」の形にする。 [例] 座らせていただきます／読ませていただきます

この記述では「～（さ）せていただく」は他の謙譲語Ⅰの一般形と同じように使用することができる。謙譲語Ⅰの一般形は、自分側を低めることによって、動作の向かう相手に対する敬意を表すのであり、「～（さ）せていただく」もそのような機能を持っているが、それだけではない。「敬語の指針」では、「基本的には、ア）相手側または第三者の許可を受けて行い、イ）そのことで恩恵

を受けるといふ事実や気持ちのある場合に使われる」とされている。近年「～（さ）せていただく」の使い方に変化が見られることが菊池（1997b）等で指摘されており、「敬語の指針」が示すような「許可」「恩恵」という意味が希薄化し、「許可」「恩恵」を得ていると見立てることができる場合にも用いられている。例えば、(5)aにおいて、実際には一方的に連絡している場合（従来なら(5)bのように言うほうがふさわしいと考えられる場合）でも、相手を立て、許しを得て連絡させてもらっていると表現していると考えれば、容認されるということである。

- (5) a. ご転居に伴う配達先の変更手続きについてご連絡させていただきます。  
b. ご転居に伴う配達先の変更手続きについてご連絡 {いたします／申し上げます}。

しかし、「許可」「恩恵」という本来の意味からあまりにも離れて、単に自分側を低めて述べるために用いるのは現時点では誤りと考えられている<sup>6</sup>。前述の『大学生のための日本語の基礎—表現編—』（帝塚山大学出版会）の記述では、「許可」「恩恵」という本来の意味が根底にあることに触れられておらず、他の謙譲語と同じように使えるとの誤解を与えるため問題があると言えるだろう。

## 5. 尊敬語の使い分け

動詞を尊敬語にする際の方法として、主として以下の3通りの方法がある。

- ①特定の形を用いる。 [例] 言う→おっしゃる、食べる→召し上がる  
②「お／ご～になる」の形にする。 [例] 話す→お話しになる、説明する→ご説明になる  
③尊敬の助動詞「(ら)れる」をつける。 [例] 書く→書かれる、出る→出られる

実際に運用する際に3通りの表現のうちどれを用いるべきかについて、考察対象の教科書ではどのように示されているのであろうか、それぞれの記述を比較する。

まず、『基礎から分かる日本語表現法』（くろしお出版）では、①や②の方が③よりも丁寧さの度合いが上がると述べている。『日本語表現法』（アイケイコーポレーション）は、一番軽い敬意を表すのが③で、重い敬意を表すのが①であるとし、大切なお客様や、上司、先生などには①や②を使うのが望ましいが、身近な先輩には③を使う方が適当であるとしている<sup>7</sup>。

両者に共通するのが、尊敬の助動詞「(ら)れる」をつけた形は敬意が低いということである。その根拠の一つとして考えられるのが、「(ら)れる」の有する多義性である。『日本語リテラシー』（新典社）は、助動詞「(ら)れる」には、受け見・自発・可能の意味もあるので、他の形にできる場合はなるべくそちらを用いた方がよいとしている。『新版日本語表現法—「書く」「話す」「伝える」ための技法』（樹村房）も同様の記述をしている。

ここで、「(ら)れる」の多義性について具体例を挙げて説明する。(6)は尊敬語としての解釈のほか、「出ることができるか」という可能の解釈ができる。(7)は尊敬語の解釈のほか、「お菓子を（誰か他の

人に「食べられる」という受身の解釈がある。話し手（書き手）としては動作の主体を敬うつもりで用いたはずが、聞き手（読み手）には他の解釈をされてしまうことがある。したがって、確実に敬意を伝えたい場合には、「(ら)れる」ではなく他の形式を用いる方がよいということになる。

(6) 明日は会議に出られますか。

(7) 先生がお菓子を食べられた。

前述したように、『日本語表現法』（アイケイコーポレーション）は、②よりも①の方が高い敬意を表すと述べているが、この記述は正確ではない。『キャリアアップ国語表現法』（嵯峨野書院）が指摘するように、「召しあがる」「おっしゃる」のような別語がある場合、「お食べになる」「お言いになる」には言わないのが普通である<sup>8</sup>。つまり、①と②の区別は敬意の高さではなく、①の言い方がある場合には②は用いず、①の言い方がない場合に②の形にするというように、相補的な関係にあるということである。

以上で各教科書の記述を紹介したように、尊敬語の3通りの言い方の使い分けには、いくつかの基準がある。その基準をまとめると以下のようになる。

- A 尊敬の助動詞「(ら)れる」は、他の表現に比べて敬意が低いため、上司や先生などに用いるときには注意が必要である。
- B 尊敬の助動詞「(ら)れる」は、受身や可能の助動詞と同じ形式であるため、解釈があいまいになることもある。
- C 「召しあがる」「おっしゃる」のような特別な形がある場合には「お／ご～になる」は使わない。

これらの基準のすべてに言及している教科書はない。それどころか、『書き込み式日本語表現ノート』（三弥井書店）など4種の教科書においては、3通りの言い方を挙げるだけで使い分けについての言及はまったくない。しかし、それらの教科書が、上記のような使い分けに関する事柄を必要がないと言っているわけではない。推測でしかないが、日本語母語話者であれば当然身に付けておくべきだと考えられているのではないだろうか。

大学生の日本語リテラシー能力の低下が叫ばれており現在の状況では、実際の指導に当たる教員としては、上記A～Cのような事柄についても必要に応じて学生に提示している必要がある。その際、日本語学等の専門でない教員が、適切な対応を取ることができるか疑問が残る。

## 6. おわりに

本稿では、主として大学生を対象とした10種の日本語表現教科書における敬語の記述に問題点が見られることを指摘した。指摘した問題点は、以下の3点である。

- ①謙譲語Ⅰと謙譲語Ⅱの区別がされていない教科書が半数を超える。
- ②「～ていただく」や「～（さ）せていただく」を謙譲語（謙譲語Ⅰ）の一般形として扱っているものがある。
- ③動詞を尊敬語にする3通りの方法について使い分けの基準が示されていない。

各教科書においてこのような問題点が含まれる背景には、大学生の日本語能力の低下がある。以前であれば、敬語の使い方に関しては、成長する過程で家庭や学校生活において習得していたのであるが、現状では意識して学ぶものへと変わってきている。教科書執筆者の意識で、このような事柄は日本語母語話者であれば当然習得していると考えられていることが、教科書の記述の足りなさにつながっていると考えられる。

多くの大学で行われている日本語リテラシーの授業において、敬語指導を行う際には、本稿で挙げたような敬語記述の問題点を踏まえたうえで、随時補足しながら進めていく必要がある。また、今後、教科書を改訂及び執筆する際に、本稿で示した問題点が参考になると考えられる。

#### 【注】

- 1 『日本語表現法―「書く」「話す」「伝える」ための技法』（樹村房）と『基礎からわかる日本語表現法』（くろしお出版）では、敬語の5分類について紹介されているものの、解説は3分類に基づいて行われている。
- 2 「おうかがいする」という表現は、「うかがう」という謙譲語Ⅰに対して、さらに「お～する」という謙譲語Ⅰの形を加えたものであり、厳密には二重敬語とされるが、「おうかがいする」は習慣として定着しているため、誤りとは見なされていない。「敬語の指針」では、同様に定着した表現であり誤用とは言えない二重敬語の例として、「お召し上がりになる」「お見えになる」を挙げている。
- 3 「お／ご～いたす」は、謙譲語Ⅰと謙譲語Ⅱの性質を併せ持ち、動作の相手に対する敬意と聞き手に対する敬意を表すとされているが、実際の場面では、「お／ご～する」よりも高い敬意を表すものとして、広く用いられている。
- 4 「お／ご～いただく」は「お／ご～になっていただく」のように、「～て」の部分を尊敬語にしたものを縮約した形であるが、ここでは、「～ていただく」の中に「お／ご～いただく」を含めることとする。
- 5 『大学生のための日本語表現実践ノート』（風間書房）は、「拝見させていただきます」のような表現について、「拝見する」も「いただく」も謙譲語であり、「せる」も「いただきます」につくと「謙譲」の意味を含むため、三重の謙譲語となり過剰であるとしているが、この記述は疑問である。まず、「せる」に「謙譲」の意味はなく、使役（この場合は許可）の意味である。また、「拝見する」「いただく」と2つの謙譲語を用いるから二重敬語というわけではない。二重敬語とは、一つの語に同じ種類の敬語を二重に使ったものである。この場合、「拝見する」は「見る」、「いただく」は「もらう」と、別々の語をそれぞれ謙譲語にしたということである。

6 例えば、上司が私用のために部下を買いものに行くよう依頼した場合、部下が、「はい、行かせていただきます」というのは不自然であり、「はい、行ってまいります」のほうがふさわしい。

7 『日本語表現法改訂版』（三省堂）では、「おっしゃる」と「言われる」のような総合型と分担型の間では、総合型の方が敬意が高いという傾向があると述べるとともに、分担型の中では、一般に付加される語が多くなるに従って敬意がより高くなると述べ、「(ら)れる」よりも「お／ご～になる」の方が高い敬意を表すことを示唆している。

8 近年「お食べになる」に関しては、そのような言い方が増えていることが、菊池（1997: 160-161）で、以下のように述べられている。

「お食べになる」は、実は、敬語になれている人なら、概して使わない形である（この形が避けられるのは、「食べる」の古形「たぶ」が謙譲語であったという歴史的な事情によるのだろうが、別にそのような事情を知らなくても、とにかく「お食べになる」とは言わないというのが、少なくとも少し前までの東京の多くの人々の意識だったはずである。もっとも、近年は「お食べになる」と使う人もずいぶん増えている。言葉はしばしば一般化の傾向を強めていくものなので、「食べる」が謙譲語性を失って久しい今日、「お食べになる」が使われるようになるのも、自然な言語変化というべきなのであろう。すでに誤りとは言にくいほどになりつつある。

#### 【引用文献】

菊池康人（1997a）『敬語』講談社学術文庫

菊池康人（1997b）「変わりゆく『させていただく』」『言語』26巻6号，大修館書店，pp. 40-47

清水史・秋山英治（2010）「高等教育における日本語リテラシー教育の現状と課題」、『愛媛大学法文学部論集人文学科編』28号，pp. 83-116

文化審議会（2007）「敬語の指針」[http://www.bunka.go.jp/bunkashingikai/soukai/pdf/keigo\\_tousin.pdf](http://www.bunka.go.jp/bunkashingikai/soukai/pdf/keigo_tousin.pdf)